

与えるという振る舞い

校長 山田浩之

教室を回っていると、こんな子どもの姿に出くわします。

算数のテストをしている時です。子どもは、真剣に問題を解いているので教室は物音一つしません。そんな時、一人の子どもが、突然鉛筆を止めて、あたりをきよろきよろと見まわし始めました。少し、困った顔をしています。ふと、隣の子どもが、そのことに気づき、子ども同士の目が合います。すると隣の子どもが、自分の消しゴムをきよろきよろしていた子どもに渡しました。消しゴムを受けとった子どもは、ささっと自分の解答を消して返しました。その間、会話やジェスチャーも無く進行することがあります。

テストに臨んでいるという同じ状況にあるので相手の困り感に気づきやすいということもあるかもしれません。子どもは、相手の必要としていることを瞬時に理解し、ほとんど反射的に与えることができるのです。子どもたちのこの振る舞いは、どうやって身に付くのでしょうか。

心理学の実験があります。生後十五カ月の子どもの目の前にクラッカーと生のブロッコリーが入ったボウルをおきます。子どもは、普通、生のブロッコリーよりもクラッカーを好みます。しかし、研究者は、その子どもの前で、クラッカーをまずそうに食べ、ブロッコリーをおいしそうに食べる様子を見せます。つまり、研究者が欲しいものは、子どもと逆であるという

ふりをしたのです。その後、研究者が手を差し出して食べ物をおねだり、子どもは、いずれかを渡すことになります。十五カ月の子どもは、八七％の子どもがクラッカーを渡しました。相手の状況よりも、自分の好みを判断材料にしたのでしょうか。ところが、同じことを十八カ月の子どもで行うと、六九％の子どもがブロッコリーを渡したのです。自分の好みと違っていても、相手の求めるものをあげること、相手のためになることをしようという振る舞い方に変わったのです。

私たちは子ども時代から、相手は何が欲しいのか、相手に何をしてあげれば助かるのか、喜ぶのかを、自らの立場と関係なく、理解する力をもち合わせています。そして、この能力を開花させ、日々の振る舞いにおいて発揮することができれば、その子どもは、多くの人とポジティブな関係を作っていけるはずです。もしそれが、一〇年、二〇年と積み重なれば、その子どもの人生は、大きな追い風を得ることになります。

子どもたちには“美しく”生きて
いてほしいと願っています。